

人権教育に関する特色ある実践事例

基準の観点	学校全体として人権尊重の視点に立った学校づくりが組織的かつ効果的に進められている実践事例
-------	--

1. 基本情報

○都道府県名及び市町村名

香川県高松市

○学校名

高松市立一宮中学校

○学校のURL

<http://www.edu-tens.net/tyuHP/itinomiyahp/>

2. 学校紹介

○学級数

【通常の学級】全学年各4学級、【特別支援学級】4学級、【合計】16学級

○児童生徒数

【全児童生徒数】396人（平成26年11月1日現在）
（内訳：1年生116人、2年生138人、3年生142人）

○人権教育開発推進事業、人権教育研究推進事業実績（実施年度及び事業の別）

平成25～26年度 人権教育研究推進事業（人権教育研究指定校事業）

○学校の教育目標、人権教育に関する目標など

【学校の教育目標】

「自ら学び、ともに未来を創造する生徒の育成」

【人権教育に関する目標】

- ・ 自分を見つめ、自らの課題であること（学習・生活・人間関係づくり）を乗り越える自分づくり
- ・ 特に課題のある子を中心として、一人ひとりが輝き、差別を許さないなかまづくり

○人権教育に係る取組一口メモ

家庭的背景や人間関係づくり、学力・生活面での子供たちの悩みを解決するために、特に課題のある子を中心としたなかまづくりを進めていく。

○人権教育にかかる取組の全体概要

	1 学年	2 学年	3 学年
目標	自分づくり	夢づくり	生き方づくり
目標の具現化のために	自分となかまを見つめて 今までの自分を振り返りながら自らを高めていこうとする意欲をもち、なかまとともに成長しようとする姿勢を育む。	自分の可能性を見つめて 様々な人や生き方との出会いから、社会とのかかわりを自覚し、豊かな感性を育む。	自分の生き方を見つめて 自分の生き方を探り、なかまとともに自らの未来を切り拓こうとする豊かな人権感覚を育む。
人権・同和問題学習	ありのままの自分に学ぶ ちがいを認め合うことや思いを共有することの大切さを学び、自分や他の人の人権を大切にする態度を身に付ける。	出会い、ふれ合い、支え合い 人間としての尊厳や夢と誇りをもった生き方について学び、自分への肯定的理解と将来への展望をもつ。	共に生きる未来へ 現在の差別の現状を知り、自分の問題として考え、それを解決しようとする実践的な行動力を身に付ける。
人間関係づくりプログラム	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; text-align: center;"> <p>人間関係づくりスキルの向上から、自他を尊重する豊かな人間関係づくりへ</p> </div> <ul style="list-style-type: none"> ○ 自己開示・自己表現し、学級内で受容される場面を意図的・計画的につくり、信頼関係を深める。 ○ 人と接する際に必要な姿勢・態度・感情のコントロールの仕方・感情の読み取り方を疑似体験をしながら学習する。 ○ 「自分を見つめ、語り、つながる」をテーマに、クラスミーティングや全体学習を行い、自分やなかまを大切にする人権・同和教育を推進する。 		

な か ま づ く り

学 級 経 営

生 徒 会 活 動

連 携

保育所・幼稚園・小学校・家庭・地域

3. 特色ある実践事例の内容

◆クラスミーティング・全体学習（語り合い学習）を通じたなかまづくり

(1) なぜ、なかまづくりが必要か

本校の生徒は、明るく素直で、前向きに学習や生活に取り組んでいる。しかし、小学校からの固定化された人間関係により、人前で自分の意見や感情をうまく表現できないなど、自尊感情が低く、なかまづくりが苦手な傾向にある。

また、どの学級にも、家庭的に課題のある子、不登校傾向の子、学習や生活面で特別な支援が必要な子などが多くいるのが、現状である。

そこで、これらの課題を解決するために、すべての子供たちが、互いの存在を実感し、自己肯定感を育み、集団における責任感や信頼感をもつことが求められている。特に課題のある子を中心にすえた、全ての子供たちをエンパワーするなかまづくりを、次の実践を通して進める。

- Y-Pアセスメントの結果より、学級や個人の課題を把握する。横浜指導プログラムによる、人間関係スキルの向上
- クラスミーティングを核とした学級のなかまづくり
- クラスミーティングから、学年・全校につながるなかまづくり

(2) クラスミーティングを核とした学級のなかまづくり

なかまづくりでは、一人一人違った個性・生活背景のある子供たちをていねいにつないでいく。クラスミーティングの「自分を見つめる→語り合う→つながる」というプロセスを通し、積み重ねることによって、学級でのなかまづくりを推進していく。

◆クラスミーティング（語り合い学習）の具体的な実践事例

① 学級開き

「学級開き」では、まず、教師がクラスミーティングの手本として、生徒に心を開いて自分の心を見つめ直し、自分の思いや決意を語る。自分も落ち込んだり、悩んだり、どんな人間で、今までどんな人生を歩んできたか、これから生徒とどうかかわっていききたいかに始まり、どんな学級にしたいか、学級で大切にしたいことなどの決意を語る。そして、学級担任と子供たちとのなかまづくりがスタートする。



そして、学級担任と子供たちとのなかまづくりがスタートする。

② 一人一人の決意表明 → 学級目標づくり

担任の話を受けて、子供たち一人一人が、スタートにかける期待・思い・決意を発表する。自分を見つめ、「学習・生活・なかまづくり」における課題は何か、どんな学級にしたいか、前向きな気持ちを発表できるように支援する。

学級目標は、みんなで共有するために子供たちとともにつくる。子供たちの新しい学級にかける願いを引き出し、子供たちに伝えたいメッセージを詰め込む。

③ クラスミーティング（体育祭・コーラス大会などの行事）



体育祭・コーラス大会などの行事は、学級内の「人」「活動」「思い」をつなぐ、なかまづくりの中心的活動になる。行事にかける「思い」を語り、どのように自主練習に取り組んでいくか、作戦を話し合ったり、練習してうまくいかないことを改善したりすることで、「クラスは自分

たちの力でよくしていける」「自分たちに任されている」など、学級での連帯感や責任感が生まれる。

その後、学級内での諸問題を解決するために、生徒が自主的にクラスミーティングを行うまでに発展するケースもある。

④ 人権総合学習や部落問題学習

人権問題に気付き、その課題を自分と結びつけて考え、その解決の視点を育てるために、クラスミーティングを行う。自分やなかまの生活、互いの関係性を見つめ、自分自身を問い直す。互いに自分の悩みや葛藤、多面性、なかまへの思いを、語り合うことで、信頼し高め合えるなかまとして、子供同士をつないでいく。



(3) クラスミーティングから、学年・全校につなげるなかまづくり



学級のなかまづくりが学年や全校のなかまへと発展できるように、学年や全校ミーティングを行う。全校ミーティングは、4月当初の学校開き、3月年度末の言魂ミーティング（全校による語り合い学習）を実施する。

学年ミーティングでは、それぞれ学級のなかま関係が深まり、学年全体につながっていくように実施している。人権総合学習のまとめや学期、学年のしめくくりとして、自分の

思いが素直に言える学年のなかまづくり、雰囲気づくりをしていく。最終的に、「3年進路公開」では、自分の生活、生い立ちを見つめ、これまでの生き方を振り返り、これからどう自分の夢や希望に向かっていくかを語れる生徒、それを支える一宮のなかまが将来もつながっていく、強い絆で結ばれたなかまになるように育てたいと考え、実践してきた。

4. 実施する際に生じた課題及びその解決策

すべての子供たちがきらきらと輝き、誰もが自分らしさを発揮できる学校であるために、一人一人が大切な存在であることに気付き、生徒同士が思いを伝え、受け止める活動を積み重ねた。

クラスミーティングの在り方を何度も討議する過程で、教職員自身が生徒一人一人の根っこにある課題と本気で向き合い、教職員自身のあり方を問い、ものの見方や価値観を変容させていった。

そして、子供たちと接していく中で、教職員はたくさんのことを学ぶ。自己のものの見方や生き方を問い直すチャンスを与えられ、子供たちの成長とともに、教職員自身も成長を実感することができた。

近年、様々な場面で子供は不適応を示すようになり、家庭と学校だけで子供を支えることは非常に難しくなっており、地域と学校が相互補完的に子供の成長にかかわっていけるための仕組みが求められる。

本校では、平成25年度より、学校アドバイザーとして大阪大学大学院人間科学研究科准教授の高田一宏先生を招き、人権教育を視点とした保・幼・小・中の異校種間連携・地域連携についての研修を重ねている。夏季休業中の研修会では、異校種の教職員が意見を出し合い、本校区の共通課題として、「コミュニケーション能力の育成 ～自分と立場の違う人との人間関係の作り方～」が明らかにされた。保・幼・小・中が共通の目標をもって一貫した教育をスタートすることができ、大変意義深い研修であった。

5. 実践事例の実績、実施による効果

	内 容	活 動 キーワード	生徒の変容
(卒業生に学ぶ会)	☆元生徒会長の高校生からの聞き取り	先輩から学ぶ！ つながる思い！	生徒会役員 ・卒業生が自分たちと同じ悩みをもちながら生徒会活動をしていたこと、少しずつ変わっていった学校のことを知り、憧れを抱き、自分たちもそうなりたいと感じることができた。 ・卒業生から「今の一宮中学校をみて思うこと」「卒業して改めて感じる一宮の良さ」を聞き、一宮中学校の生徒としての誇りが伝わってきた。それが、生徒会役員の自信につながっている。
委員会活動の充実	☆重点委員会の発表 ・各委員会が自分たちの取組みを生徒会朝会で呼びかける。 ☆中央委員会の活性化 ・現状を振り返り、自分たちで課題を見つける。そして、委員会活動に広げる。	By ourselves 自分たちの手で！	・今まで人前で話すことがなかった生徒たちが、自分たちの活動を広げていこうとプレゼンテーションを作成したり、呼びかけをしたりして他の生徒たちへの働きかけをしていこうという姿が見られた。 ・月に1回の中央委員会で、今の一宮中学校に必要な活動は何かを考え、今月の生活目標を設定するようになった。その活動が、自分たちの手で学校をよくしていこうというリーダー育成の場となっている。

	内 容	活 動 キーワード	生徒の変容
体育祭・文化祭	<p>☆企画・準備から生徒の手で！</p> <p>☆体育祭実行委員の募集</p> <p>☆コーラス大会実行委員の募集</p>	一人一役！学校のために！生徒に任せる！	<p>・やりたいことはあるけど、伝え方が分からず、自分たちの活動に自信がなかった生徒会役員。企画から練習指導まで生徒自身の手でやり遂げる試行錯誤のなかで成功や失敗を繰り返した。行事が終わった時、自分たちでやり遂げる責任感、充実感を感じると共に、人のために、学校のために働くことの幸せや一宮中学校生徒の一員としての居場所を確認できるきっかけとなっていた。</p> <p>・全校練習が失敗した時、落ち込む生徒会役員に対して「大丈夫、一緒に次のこと考えよう」という級友の言葉。生徒会役員の熱意を受けとめる生徒の姿やそれを支える生徒同士のつながりを感じた。</p>
学校開き	<p>☆新しい学期を迎えるにあたっての思いの共有</p>	自分の言葉で思いを語る！	<p>・新1年生を迎え、これからこのメンバーで一宮中学校を作っていこうという決意を新たにできた。</p> <p>・新しいクラスや担任、自分の居場所への不安を語る生徒の姿も…。</p> 
言魂ミーツィング <small>ことだま</small>	<p>☆なかまづくりの総決算</p> <p>☆3年生から後輩への継承</p>	自分の言葉で思いを語る！	<p>・1年間の学びの共有。一宮中学校で学んだこと、成長したこと、なかまへの思いを出し合い、学校愛を確認するとともに、次なる年度へのステップとなった。</p> <p>・自分の姿を振り返り「自分は勉強で後悔したけん、1・2年生は今、勉強を頑張ってほしい」と語る先輩の姿。その言葉から自分の生活を振り返る後輩。上級生からバトンが渡される場。後輩にとっては、先輩への憧れと誇りを感じ、来年の自分のあり方を考える場となった。</p>
ボランティア清掃	<p>☆「清掃に学ぶ会」への参加</p> <p>・生徒会役員&整美委員そして地域の方たちと「清掃に学ぶ会」に参加</p>	学校、そして地域と共に！まずは自分から！	<p>・学校のトイレもきれいにしよう！ということで、春休みにトイレ清掃を企画。約100名のボランティアが参加。整美委員がリーダーとなり学んできた清掃の仕方を伝授。</p> <p>・保護者の方も一緒に参加し、共に汗を流した。</p> 

6. 実践事例についての評価

クラスミーティングは、単に自分の思いを語るのではなく、そこから、自分やなかま、教職員同士がどうつながり、どんな生き方をしたいかを見つめ、成長することが目的であると共通理解しながら実践し、成果をあげてきた。しかし、生活背景や課題により孤立したり、今はまだ自分を見つめられていなかったりする生徒も存在する。

私たち教職員は、「家庭訪問を大切にした日常のかかわりで保護者の願いを受け止めているのか」「差別解消へ向けての実践が行えているのか」「地域との信頼関係を基盤に、子供たちの将来を見据えて本気で向き合う、魅力ある教職員集団になっているのか」など、自分自身に対して常に問い続けていきたい。

【人権教育の指導方法等に関する調査研究会議によるコメント】

高松市立一宮中学校

生徒活動に主眼を置く中で、学校をあげて“仲間づくり”を強力に推し進めた事例である。

自尊感情が低く、仲間づくりが苦手という生徒たちの実態を踏まえ、学習や生活面で特別な支援が必要な子等、課題を有する生徒たちを学級・学校経営の中心に据え、主体的でオリジナリティーあふれる種々の手立てが講じられている点が特筆される。取組の冒頭には、教師をはじめとするクラスの全てのメンバーが自らを語り、自らをさらけ出す「学級開き」が位置づけられている。そこで築かれた人間関係をもとに、クラスミーティングや全体学習といった“語り合い学習”が展開され、年度末の「言魂（ことだま）ミーティング」へと結実している。こうした一連の手法は、生徒たちが互いに思いを共有し、仲間として共に支え合う人間関係づくりを目指す上で極めて重要なステップであると考えられる。

今回の報告を一つの契機として、一宮中の人権教育の歩みがますます拡大していくことが望まれる。